自然言語におけるトピック転換と笑い

水川　喜文

笑いに関する研究は数多くあるが、笑いという現象そのものを実際の録画・録音データを使って分析・考察したものは数少ない。従来の「笑いの研究」のほとんどは、冗談の研究だったといえる。笑いは、冗談やユーモアの副産物として扱われ、笑いという活動そのものは、無視されてきたのである。これに対し、相互行為の場面における笑いの分析を始めたのは、会話分析やエスノメソドロジーである。本稿では、会話分析の知見を用いつつ、笑いをトピックの組織化、特にトピック転換と関連させて論じていく。そして、笑いがトピック転換関連ポイントを生み出す相互行為上の活動であることを導く。

1　はじめに

本稿では、相互行為において実際に起こっている笑いの分析を行ってみたい[*1]。現在まで、笑いの研究と名付けられたものは多いが、相互行為場面における笑いを分析した研究は数少ない。笑いの研究のほとんどは、「冗談」の分類・例示だったり、笑いについてのイメージの研究だったりするのである。そうでない場合でも、笑いの実証的な分析として、情報処理モデルの構築や脳内の生理学的分析という方向ですすめられる場合が多い [水川 1992b:28-31]。

ここでは、実際の笑いを厳密に分析するためのもう一つの視点を提出してみたい。すなわち、会話分析の知見、中でも隣接ペアと順番取りシステムの発想を用いて、トピック転換の場面における笑い注目にして論じて行きたい。その際に、本稿では、有声の笑い、つまり会話データに現れる笑いに限定して、分析を行っていきたい[*2]。これによって、会話データだけでも多くのことを発見することができることが分かるだろう。

議論の道筋としては、まず、これまでの笑いの研究を三つに分類し、それらの問題点を指摘し、今回の分析の特徴を描き出す。次に、トピック転換について簡単に考察し、それをもとにして、隣接ペアと順番取りシステムから笑いの相互行為における特性を導き出す。さらに、この諸特性を笑いの実践的推論と関連づけ、punchlining（オチをつけること）を相互行為における笑いの力と位置づける。最後に、トピックが転換されるかどうかをモニター (monitor) する場として「トピック移行関連ポイント」を提案し、笑いは、その関連ポイントを創り出す発話行為であると論じていきたい[*3]。

データ

本論では、「箱庭療法」の実験的なセッションの録画テープをデータとして取り上げた。箱庭療法とは、心理療法の一つの手段である[河合 (ed.) 1969:3-9]。被験者が、砂の入った平たい箱の中（箱庭）に「自由」に人形等を置いていき、その際の過程や結果が心理療法に利用される。分析者（セラピスト）は、箱庭のそばに

いて、許容的な態度で作品のできあがりを楽しむような気持ちで接する。今回は、「治療」としての心理療法を受けているクライアントではなく、一般学生等を被験者とした。箱庭は、20分ほどでつくられ、その後に、分析者や他の参加者を交えて、作った箱庭について雑談風に話してもらい、そのときの会話を主に分析した。会話分析において、データは、数量的分析によって帰納的に結論を導くために使われるのではなく、デモンストレーションのために使われる。また、「箱庭療法」だけに現れる特徴を描き出すために、今回のデータに選んだのではない。従って、「箱庭療法」は、一つの「フレーム」として働いているとここでは考える。今回のデータは、相互行為において「笑い」という活動がいかに組織されるかということを呈示するために利用した[4]。

さて、日常的な会話を注意深く聞くと、笑いがトピックの終了部分で頻繁に起こっていることがわかる。例えば次のように。(データ1より抜粋。表記法は、トランスクリプトの説明を参照)

ＡＮ　忍びないでしょうけど＝　　//hhhhh
ＭＹ　　＝いい//えhhhhh
ＴＪ　　//hhhhhhh
　　(·)
ＡＮ　ＭＹさん　これは　どこなんですか＝
　((別の話題))

この例では、ＭＹが「いいえ」といった後に、三者の笑いが起こり、トピックが転換している。このような現象がいかにして起こっているかを分析するのが本稿の課題である。

2　社会学的現象としての笑い

まず、従来の笑いの研究を三つに分類するすることから始めてみたい。

第一に、心理学的アプローチと呼べる研究群がある。これは、笑いを個体内の心理的・認知的過程から考えたり、個人的な性格（笑いやすい）から説明する。例えば、フロイトの「心的エネルギーの放出」による「昇華」という考え方や、笑う際の情報処理過程をモデル化する手法などである。

第二に、生理学的アプローチがある。笑いを、身体や脳内の生理学的過程として分析するのである。例えば、笑うときの顔の筋肉の動きや、脳内の生理作用の解明などである。

第三に、「主体主義的」アプローチがある。これは、行為者が、笑いによって状況を「主体的に」異化するというものである。「異化効果論」などがこれにあてはまる。

こういった論考にも、笑いのイメージのみを扱ったり、冗談を分類する論文というよりは、相互行為で現実に起こっている笑いについて分析しているものもある。しかし、それらにおいてさえ、「笑い」ではなく「冗談」の研究になってしまう場合が多い。

心理学的アプローチの多くは、認知上の「ズレ」や「おかしみ」が個人の内部に起こると、自動的に笑いが起こるとしている[5]。すなわち、「冗談」のような行動（原因）の結果として自動的に起こる副産物としての笑いしか考察しないといえる。逆に、認知の内容を問わないようにするために、笑いを生理学的な現象に限定してしまうと、笑いの場面から引き離されてしまうことになる。

また、「主体主義的」アプローチをとると、状況を変化させるために行為者が意識的・意図的に行うものとしてのみ笑いを扱ってしまう。

何か（結果）の原因としての笑いしかみていないばかりか、笑いを操作できる主体を前提にする主体的行為としての笑いしかみていないことにもなりかねない。いずれにせよ、「笑い」という現象そのもの、「笑い」の起こる場面を無視してしまいかねないばかりか、笑いを「社会的なもの」として扱っていないともいえる。

これらと対照的に、相互行為場面における笑いを分析しはじめたのはE. Goffmanである。彼は、笑いを「あふれ出し」として論じた[1961: 55-61=1985:51-63]。その際に、E. Goffmanは、笑いを生理的現象として、「あふれ出し」であるとしながらも、行為者のテンションレベルによって我慢できたり、できなかったりするとした。笑いは、個人的な現象が、公的な場所で起こっているとしていたのである。しかし、相互行為における笑いを分析する際に、笑いが「あふれ出す」ことを前提にする必要はないのである[水川 1992b:32-35]。G. Jeffersonは、笑いを相互行為を達成するための社会的資源として扱うことを提案し、次のように述べた。

> 笑いは、それゆえ、いつもあふれ出しであるわけではない。「笑わずにいられない」というように話し手に襲いかかってくると理解されるものではない。相互行為の資源として処理することができ、笑いが起こる仕方を名付けるに値する以上に、いつどこで起こるか注意深くなるに値するシステマティックな活動である[Jefferson 1985:34]。

後にE. Goffmanは、笑いを転調(keying)やフレームと関連させて論じたが[1974:350,357-358]、「あふれ出し」という基本路線は変わっていない。このように、従来の研究に示唆される点は多いが、むしろ以上の考察からわかったことは、相互行為における笑いはほとんど研究されてこなかったということである。笑いを「社会的なもの」すなわち「社会学の対象としての現象」として扱っていく必要がある。本稿では、会話分析の手法を用いて、「笑い」が、会話の継起の中で、相互行為場面のメンバーによっていかにして達成されていくかを考察していくことになる[6]。特に、会話分析においても、隣接ペアと順番取りシステムを利用して考察したのは、本稿が初めての試みである。

3 トピックとトピック転換

笑いの分析を始める前に、本稿のもう一つのテーマである、トピックについて考察する必要があるだろう。会話が、通常いくつかのトピックにより構成されるとすると、トピックは、会話が開始された後に次から次へと転換して終了へと持ち込まれる、と考えられる。

会話＝（開始）トピック１＋トピック２＋……＋トピックｎ（終了）

トピックとは会話の内容の区切りである、というように単純に言うことはできない。会話のある部分において、何がトピックとなっているのかを、簡単に決定することはできない。例えば、「鯨」から「アフリカ」へとトピックが転換されたと考えられる場合でも、「エコロジー」というより広いトピックで一貫しているとも考えられるからである。

> 「トピック」は、最も複雑な会話現象の一つとして解明されるべきであり、同様に、システマティックな分析に対して最も扱いにくいものだといえるだろう。[Atkinson; Heritage 1984:165]

しかしながら、相互行為のメンバーは、その時点のトピックがいかなるもので、いつ終わり、次のトピックがいつはじまるのか注意深くならなくとも「自然に」アカウント(account：説明)[7]でき、適切にこういった作業を遂行してい

る。そして、メンバーにとって適切でないと思われる会話が起これば、適切なものに修正するテクニックが用いられる。

トピック性(topicality)とは、話されている内容の問題であるとともに、メンバーがアカウントや継起の適切性を示すのに用いる「手続き(procedure)」でもあるからである[Maynard 1988 : 263]。ここでは、ひとまず、メンバーが「自然に」トピック転換が行われたとわかる最小の場所をトピック転換の場所としてみよう。言い替えれば、その順番取りによって、メンバーの志向するフレームが移動する最小の場所としてもよいだろう[8]。

エスノメソドロジーでは、トピック転換を扱った研究がいくつかある（[Button;Casey 1984] [1985], Maynard [1980])[9]。これらは、特にトピックの開始に重点をおいた研究と考えられる。これに対して、本稿では、相互行為におけるトピックの終了と笑いの関係について論じていきたい。

4　相互行為の組織化と笑い

一般的に、人が笑うのはおもしろかったときであり、笑いは冗談などの後に起こるという共通理解がある。しかも、笑いは、しばしば冗談の直後に起こる[Mulkay 1988:114][10]。

［モデルＡ］

第一の話し手:　おもしろい発言や行動

第二の話し手:　（即座の）笑い

データ１のＡＮ２、ＭＹ２、ＴＪ２は、このパターンの一つとも考えられる。伝統的社会学はこのパターンを、原因－結果図式で扱ってきた。ＡＮの発言「忍びないでしょうけど」が原因となって、ＡＮ自身とＭＹ、ＴＪの笑いが起こった、と。しかし、先にも述べてきたが、G. Jefferson [1985]等の研究をもとにすると、笑いが、必ずしも冗談の結果や副産物でないことがわかる。むしろ、継起における笑い(laughter-in-sequence)がエスノメソドロジー的アプローチによって分析されるべきであることがわかる。

まず、笑いが、相互行為においていかに組織化されているかということを、隣接ペアと順番取りシステムら考え始めることができるだろう。隣接ペアとは、「問い」と「答え」、「挨拶」と「挨拶」のような、一組のペアのことである[Schegloff; Sacks 1973:295-6]。会話活動は、このような隣接したペアによって遂行されていることが観察できる。前の発話行為を「第一ペア」、後の発話行為を「第二ペア」と呼ぶ。例えば、「首を縦に振る動作」は、「質問」の後に位置づけられることで、「肯定（応答）を示すうなずき」となる。また、第二ペアには、第一ペアとなじみやすい発話行為が優先的にくる。「依頼」の次に「承諾」がくれば話しはスムーズに進む。このような第二ペアを優先的第二ペアと呼ぶ[Heritage 1984:265-269]。しかし、第二ペアとして「拒否」が続く場合は、「拒否」の前に沈黙などが配置されて、会話の構造が複雑になる。この第二ペアを非優先的第二ペアという。例えば、依頼をされたのを拒否する場合は、ひと呼吸おいてから拒否をする方が自然であるというように。これと同様に、第一ペアのすぐ後に優先的第二ペアが続かないで、沈黙などが続くと非優先的ペアがくるとアカウント（説明）されることになる。例えば、とまどって「承諾」すると、「拒否」が続くための前置きともとられてしまう。

このような観点から［モデルＡ］を見ていくと、笑いは、冗談を主な第一ペアとする、適切で優先的な第二ペアであるといえるだろう。

[モデルB]
第一の話し手:おもしろい発言や行動
[第一ペア]
第二の話し手:(即座の)笑い
[優先的第二ペア]

さらに、会話の順番取りシステム[Sacks; Schegloff; Jefferson 1974]を考慮すると、笑いは、通常の発話と同様に一つのターン(順番)と考えることもできる。しかし、次のようにターンとしては例外的特徴もある。

(1)笑いは、重なり合うことがある(原則的には、会話中のターンの重なり(overlap)は、最小限にとどめられる)その時、重なった笑いを同時に止めることは困難である。
(2)笑いは、話の最中にターンとして起こることがある(原則的には、ターンは話の最中に起こりにくい)
(3)笑いの最中に、次のターンが始まることがある。(原則的には、ターンが、ターンに重なることは、不適切な活動として扱われる)

笑いは、基本的にはターンとして考えることはできるが、以上のような例外的な性質を持っている[11]。さらに、笑いのインデックス性(indexicality)をもとに次のような特質を考えると、相互行為を行っている社会のメンバーにとって笑いがいかなるものか描き出すことができる。

(4)笑いの意味は、単一の笑いによって決定することはできない。
(5)直後の発話よりも、直前の発話や活動を考えた上で意味が与えられる。

以上よりまず分かってくることは、笑いが起こったとき、その意味は、まず前の活動と結び付けて考えられるのであって、後の活動と結びついて考えられるわけではない、ということである。つまり、笑いは、一つ前の活動を考慮してアカウント(説明)されることになる。そしてまた、笑いは、一つ前の活動のアカウント(例えば、冗談であること)を示す活動である。すなわち笑いは、第二ペアとなりやすく、第一ペアにはなりにくいという特性がある。第二ペアは、第一ペアがわかったという証拠となる。冗談の後に笑いが続くということは、その笑いは、冗談に対して発話されたと同時に、前の発話を冗談であるとわかったということも示している。

さらに、笑いは、単純な第二ペアではない。笑い以外のほとんどの発話は、位置づけ方によって、第一ペアになったり、第二ペアになったりすることがある。しかし、笑いは第一ペアになりにくいという性質を持っている。つまり、笑いが起こると、前の活動が第一ペアになり、笑い自体は第二ペアとしてアカウントされてしまうのである。この性質は、ペアの構成を一定の形式に導くことになる。つまり、「何かが起こったから笑いが起こった」と推論されることと考え合わせると、笑いがきて初めて、前の活動が第一ペア(主として冗談やおもしろいこと)であることが示されることになる。通常の隣接ペアでは、第一ペアが行われることによって、第二ペアを生み出すという活動がなされるが、笑いの場合、その逆も起こりうるのである[12]。

また、笑いは、オーバーラップしても、第二ペア部分の性質を持っている。それゆえ、オーバーラップした笑いの後の、新しい第一ペアが、笑いの途中や、すぐ後で始まることもできる。この点については、後の議論で取り上げること

にする。

5　笑いの実践的推論

笑いの特徴(4)と(5)で説明されている事態は、モデルＡのところでも指摘したが、伝統的社会学が主張してきた通り、ある原因からの結果としての笑いがあるという「原因－結果図式」からも理解することもできる。しかし、会話分析の視点から、実際のデータにつき合わせてみると、このような図式が必ずしも当てはまらないことがわかる。

ただし、この原因－結果図式から、笑いの実践的な推論を考えることはできるだろう。すなわち、社会的なメンバーが、日常的活動において笑いをアカウント（説明）する方法を問題にすることはできる。相互行為場面のメンバーは、笑いの「原因」や「理由」を、笑いの前の活動から見つけだそうとする。もちろん、それが「本当の原因」や「本当の理由」でないとしても、見つけだそうとする活動は行っていると考えられる。適切な笑いが起こるとは、笑いが適切な継起に位置づけられる、ということである。つまり、笑いの前の発言や活動が、笑いの「原因」とアカウントできる継起に位置づけられることによって、適切な笑いとアカウント（説明）される。言い替えれば、何もないときに笑いが起こるといった、「第一ペア」として笑いが起こると不適切な活動となる。明らかな「原因」のなかったときに、笑いが起こると、人々は、何か笑うべき理由／原因があるものだと考える。つまり、笑いが最初に起こると、その原因／理由が探されることになる。例えば、

第一の話し手：　「ハハハハ」
第二の話し手：　「何で笑ったの？」
（または「どうかしたの？」など）

笑いの特徴(5)を考慮すると、笑いの一つ前の活動が、笑いが発生することによって、笑いが起こった「原因」もしくは「理由」としてアカウント（説明）するという推論がなされたことがわかる。笑いは、このような実践的な推論を達成する発話行為であるということができる。

6　Punchlining（オチをつけること）

笑いが起こることによって、前の活動は「原因」であるとされるだけではない。それに加えて、前の活動が、それまで継続してきたトピックの「オチ(punch line)」であるという推論がなされる。相互行為のメンバーによる重なった笑いは、メンバーが協働でその「オチ」を確認する活動といえるだろう[13]。適切な「オチ」でない場合は、笑うことが適切でない活動として会話が継続することになる。

また、「オチ」をつけるとは、それまでの話の区切りをつけることになる 。従って、笑いによってオチを確認する作業は、それまでのトピックを続けるかどうかのモニターをする過程ともなりうる。笑いによって導かれたトピックの終了を承認することによって、前のトピックを継続しないことになる。この時には、笑いの直前の活動から前のトピックの終了の継起が始まっていることになるのである[14]。

いずれにせよ、適切な笑いは、隣接ペアのうちの第二ペアとして発話されることになる。この笑いをメンバーが協働で確認してしまうと、笑いがトピック終了のための第二ペアであることを確定してしまうことになる。この第二ペアを認めることは、同時にトピックの終了を承認したことになる。さらに、笑いという第二ペアに続く活動は第一ペアとなり、新たなトピック

の開始とアカウントされる。

例えば、笑いの後に沈黙や第一ペアがきてしまうと、笑いの前のオチ（パンチライン）を承認して、トピックの終了を導いてしまうことになる。別のパターンとしては、笑いとオチ（パンチライン）を承認した後に、トピックの終了交換に入ることもある"[15]。

それゆえ、メンバーが、トピックを終了したくないときは、笑いに重ねて前のトピックを話し始めるなどといったテクニックが使われる。笑いが続いている間に反論したり、同意したりすることによってトピックを継続していくという方法が取られるのである。

7　分析

これまでの考察をもとにして、実際のデータの分析を試みてみたい。

データ１の分析

ＡＮは「忍びないでしょうけど」と冗談を言って、ＡＮ自身とＭＹ、ＴＪが笑う。ＡＮの発話（冗談）は、後に笑いを伴うことによって冗談としてアカウントされると同時に、メンバーは、冗談によって笑いが起こったとアカウントする。一方で、ＭＹ２の「いいえ」という発話は、ＡＮ２の「忍びないでしょうけど」という「質問」の適切な第二ペアであり、ＭＹの発話は、ＡＮの発話（質問）に対する（潜在的に）可能性のある第二ペア部分（応答）である。三人の重なり合った笑いとそれに伴う沈黙は、前のＡＮ２の発話をパンチラインとして、先のトピックの終了を承認している。重なった笑いの後に、ＡＮは、質問のための順番をとっている。箱庭療法が分析者の質問によって展開していくことを考えると、ＡＮは質問することで、自分を分析者として位置づけていることがわかる。

ＴＪ４の笑いは、ＡＮ４の発話と重なり合って笑っている。ＡＮが間違った名前を呼んだからである。ただし、この継起は単純ではない。ＡＮは、ＴＪの笑いと重なりながら発話を継続している。ＴＪの笑いは、ＡＮの発話に対する（潜在的な）第二ペアになる。しかし、ＡＮは、自分の間違いにふれずに、前の発話を繰り返している（「じゃない、ＴＪさんだ……」）。つまり、重なった笑いの次の発話において、間違いを認めるという新しい第一ペアではなく、先の第一ペアを繰り返している（リペア）。笑いの次の発話を、間違いに関連した第一ペアにしてしまうと、ＡＮの間違いがトピックになってしまう。そうすると、ＡＮは、この部分では、分析者としての役割を持つことが困難になり、もう一度分析者の役割をとるために、そのトピックを終了に導く必要が生じてしまう。こういった困難を回避するために、分析者としてのＡＮは、笑いの最中に第一ペアを繰り返して、笑いが第二ペアとならないように操作(manage)したのである。

データ２の分析

ＭＹ１の発話は、ＴＧ１が笑うことによって、「冗談」としてアカウントされることになる。ＡＮの発話は、ＴＧの笑いに重なって始まることで、話題の継続を示すと同時に、応答＋提案になっている。それから、提案／受諾の継起が始まっている。この継起は、彼女の提案に対する応答または受諾としての「笑い」（ＭＹ３、ＴＧ３）によって終わっている。適切な第二ペアである「受諾」の発話が伴っているわけではない。

そして、ＭＹ３とＴＧ３の笑いは、前の発話をパンチラインとして承認し、トピックの終了をモニターする継起へと入っている。そこで、ＭＹとＴＧは、一緒に笑うことによって、前の

トピックの終了をわかりあう合うことになる。共に笑った後の沈黙は、トピックの終了の確認となっている。沈黙の後で、相互行為の参与者は再編されてＭＹとＴＧになり、トピックが転換している。

データ３の分析

ＫＳの冗談「地球防衛軍は？」は、次にある共同の笑いによって「オチ」のあることが承認されたかに見える。しかし、ＮＺは、笑いの最中に第二ペア（応答＋反論）を発することで、トピックを継続している。ＮＺは、ＫＳの発話を承認していないというアカウントが得られる。それから、質問／応答の継起が始まる。最後にＡＮ（分析者）が、「円谷プロダクション用ですね」という冗談を言って、参加者全員が笑うことで、ＡＮの発話が「オチ」であることが承認される。その後にトピックが転換する。言い替えると、ＡＮは、ＮＺとＫＳが議論するという事態から逃れることができ、冗談によって、箱庭療法セッションへと移行することができたのである。

データ４の分析

１行目のＭＹの「こんなもんかな」という発話は、質問ともコメントともとれる。ＭＹとＴＧの笑いが、前の発話を（ＭＹ１）を、オチ（「冗談」とはいいにくい）にしている。それに続くＴＪの「もう終わっちゃったの」という発話（質問）は、ＭＹの応答とＴＧの笑いを第二ペアとしている。ＴＪの質問とＭＹの「うん」という隣接ペアは、「オチ」を確認する作業である。次の沈黙は、さらにトピックの終了を確認している。その後、トピックが転換している。

8　笑いとトピック移行関連ポイント(topic transition relevance point)

笑いの発生が、自動的にトピック転換を引き起こすということはできない。しかし、笑いという活動(activity)は、トピックが、転換されるか、されないかという分岐点となるポイントを生み出すことになる。笑いは、トピック終了のパターンの一つであり、前のトピックを適切に転換する可能性のあるポイントを生み出すことは確かである。そのポイントが発生すると、相互行為のメンバーは、互いの出方を伺いながらトピック転換に関連(relevant)のある継起へと突入する。このポイントにおいて、トピック転換は、メンバーによってモニターされることになる。

トピックが適切に終わるのは第二ペアの発話においてであることなどを考え合わせるなら、笑いは、トピックを適切に終える装置の一つとして考えることができる。トピック転換のきっかけを考察する場合、トピックの開始時を中心に論じられることが多かったが[Maynard 1980]、トピックが転換するきっかけは、笑いのようにトピック終了時についても考察する必要がある。

H.Sacksら[1978:12]は、話者交代がレリバントになるポイントを移行関連場(transition relevant point)と呼んだが、トピックについてもその転換がレリバントになるポイントが存在すると考えられる。このようにトピック性が、処理(manage)されるポイントを「トピック移行関連ポイント(topic transition relevant point)」ということができるだろう。このようなポイントは、笑い以外によっても生み出されると考えられるが、それを考察するのは、本稿の範囲外である。

さて、これまでのような笑いの分析結果は、データを日本語に限定したから描き出せたものではないと考えられる。むしろ、言語的な相互

行為における笑いという発話の性質から導き出したものといえるだろう。日本（語）の笑いに特殊性があるとすれば、以上のような笑いの基本的な性質を前提として現れると考えらる[16]。笑いがどの位置で、どのようになされるかということは、相互行為自体の主導権の問題でもあるし、相互行為者の関係の問題でもある。今後は、笑いの基本的な性質をもとにして、個別の問題も論じていきたい。

トランスクリプト：

表記法：ＡＮは分析者（セラピスト）、他のＭＹなどは箱庭療法のセッションのクライアント。各行の数字は発話順番を示し、同一の数字の行は、同時に行われた発話または沈黙を示す。二重カッコ内は、データについての説明・コメントを示す。

h　：笑い
//　：発話の割り込み、同時発話の開始
＝　：話の終了と同時に次の発話が始まっていることを示す。
(1.5)：カッコ内は、0.5秒単位の沈黙を示す。0.5秒以下の沈黙は、(·)で示す。

データ１　((ＭＹさんの箱庭についての会話が終わって、ＴＪさんの箱庭に移る際に))

ＭＹ１　こわしちゃっていいですか＝
ＡＮ１　＝こわしちゃっていい
ＴＪ１　((nod))

ＡＮ２　忍びないでしょうけど＝　//hhhhh
ＭＹ２　＝いい//えhhhhh(·)
ＴＪ２　//hhhhhhh

ＡＮ３　ＭＹさん　これは　どこなんですか＝
ＴＪ３　＝ＭＹさんは　もう＝

ＡＮ４　＝じゃ//ない　ＴＪさんだ //ＴＪさんだ　ごめんＴＪさんは＝
ＴＪ４　//hhhhhhhhhhhhhhhh//

ＴＪ５　＝あ　なんとなく海というよりは ((別の話題))

データ２　((ＭＹの箱庭を作っている際の雑談場面、6.0秒沈黙の後))

ＭＹ１　こんなんで(･)先生わかるんですか＝
ＴＧ１　＝hhhhhhhh//

ＭＹ２　＝はあい＝
ＴＧ２　//hhhhhh　＝はあい＝
ＡＮ２　//そんなこと考えなくていいからやりたいようにやればいいのよ ＝

ＭＹ３　//hhhhhhhh
ＴＧ３　//hhhhhhhh(･)　なんか心理学の先生が
ＡＮ３　＝心理をわかるためにやるんじゃない//から

データ３　((ＮＺの箱庭が終わって、雑談をしている場面。ＴＳがＮＺの箱庭についてコメントをしている))

ＮＺ１　//hhhhhhhh　//そん//なもんありませんよ(･)
ＡＮ１　hhhh//hhhhhhhh//hh//hhhh//
ＫＳ１　地球防衛軍は？(0.5)hhhh//hhhhhhhh//hh//hhhh//
ＴＡ１　//hhhhhhhh//hh//hhhh//

ＡＮ２　//怪獣にやられっぱなしの(･)
ＫＳ２　hhhhhhやh られっぱ//なしなんですか

ＮＺ３　hhhh
ＡＮ３　円谷プロダクション用ですねhhhh(6.0)　[別のトピック]
ＫＳ３　hhhh　なんか(･)天使が浮いていると

データ４　((ＭＹが箱庭を作り終えるところ。1分15秒沈黙の後の会話。ＭＹは5.0秒前に人形を置いた))

ＭＹ１　こんなもんかな(･)hhhhhh//　//うん(1.5)
ＴＧ１　hhhhhhhh//hhhhhhhhhh　hhhhhh //hhhh
ＴＪ１　//もう終わっちゃったの(･)

ＭＹ２　うん(4.0)寂しい？
ＴＧ２　あ、ほんと金魚がいる

註

電子メイルＩＤ：NIFTY-Serve:JBB03444（大学間ネットよりJBB03444@NIFTYSERVE.OR.JP）

本稿は、International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (1992年8月 at Bentley College, U.S.A.)および、第65回日本社会学会大会一般研究報告（1992年11月　於：九州大学）における報告を修正・加筆した論文である。コメントをいただいた多くの方々に感謝したい。

*1 題名にある「自然言語」とは、実際に使われている言語のことで、理想化によってあるいは想定でに創り出した人工言語（コンピュータ言語やモデル作成のための言語など）と区別される。

*2 もちろん、微笑みなどの顔の表情も「笑い」に含めることはできる。しかし、表情も含めてしまうと、分析の厳密さが失われ、笑いのイメージや「行為者の主観」を想定することによって分析が進行してしまう可能性が高い。従って、このような多様な「笑い」を含んだ研究は、今後のヴィデオ分析等に委ね、本稿では会話データの分析に専念したい。

*3 なお、本稿は、日本語の会話データを利用したが、分析結果は、日本語の特性として読まれるべきではないと考える。むしろ、日本（語）の笑いが特殊であるという議論に疑問を投げかけるものである。

*4 本稿のデータとなる録音録画に際しては、東京都立医療技術短期大学の駒松仁子氏および３名の学生にたいへんお世話になった。記して感謝したい。

*5 足立[1984]は、笑いの研究を「嘲笑理論」と「優越理論」に分けて考察を始めているが、この二つとも基本的には、認知における「ズレ」の研究である。

*6 笑いという感情表現が、相互行為場面においていかなる達成(accomplishment)であるかという問題は、感情社会学と接点を持つ。

*7 H.Garfinkel[1967]の用語。

*8 笑いやフレームなどについて考察することによって、トピックが「自然に」転換するということがいかなる手続きでなされるかという、トピック性の生み出され方を分析することもできるだろう。

*9 例えば、H. Sacks [1971→1992]は、トピックが次々に転換する「段階的トピック移動(stepwise topical movement)」と、次のトピックが導かれることによって前のトピックの終了となる「境界的トピック移動(boundaries topical movement)」に分けて考察した。D. Maynard [1980:263]は、話し手の交代が不成功になったときの解決法としてトピック転換を考察している。また、トピック転換の際に話し手が交代するとは限らないので、一人が話している最中にトピックが変わることも問題にすることができる。

*10 冗談ー笑いに関しては、H. Sacks [1972 = 1989 : 116]を参照。

*11 ターンとなるには、「音」でも「音のない状態」でも良い。例えば、沈黙は、「質問」の直後に位置づけることによりターンとなり、「無理解」などを意味することになる。「ええ」は、ターンのパスとなることもできる。

*12 笑いという第二ペアが、遡って第一ペアを生み出すという特性を、遡及的効果と呼ことにする。この性質は、カリフォルニア大学ロスアンジェルス校のMelvin Pollner 教授との会話 (1992年) から発想を得た。

*13 G.Jeffersonら[1987]は、協働の笑いと親密性(intimacy)について論じている。

*14 G.Jefferson[1979]は、この現象について、笑いの受諾・拒否という観点で論じたことがある。

*15 終了交換については、E. SchegloffとH. Sacks [1973=1989]を参照。

*16 例えば、「恥ずかしがったときの笑い」といわれるものは、第二ペアの発話をして、その時のトピックを転換したり、別の問いかけを求めたりという相互行為が次に来ることを導いているともいえる。

参考文献

足立和浩　1984 「『笑い論』のためのメモランダ」『現代思想：特集＝笑い』12(2): 46-63

M. Atkinson; J. Heritage(eds.) 1984 *Structures of Social Action* Cambridge University Press.

----- 1991 "Conversation-in-a-Series", in Boden, D; Zimmerman, D.(eds) *Talk and Social Struture* University of California Press.

Button, G.; Casey, N. 1984 "Generating topic: the use of topic initial elicitors" in M.Atkinson; J.Heritage(eds) *Structures of Social Action* Cambridge University Press.

----- 1985 "Topic Nomination and Topic Pursuit" *Human Studies* 8:3-55.

Freud, S. 1948=1970 「機知－その無意識との関係」『フロイト著作集 4』人文書院

木村洋二　1983 『笑いの社会学』世界思想社

Goffman, E. 1961 *Encounters,* The Bobbs-Merrill.=1985 佐藤;折原訳『出会い』誠信書房

----- 1974 *Frame Analysis* Harper and Row.

Heritage, J. 1984 *Garfinkel and Ethnomethodology,* Polity Press.

Jefferson, G. 1979 "A Technique for Inviting Laughter and Its Subsequent Acceptance, Declination", in Psathas, G. (ed) *Everyday Language,* Irvington Press :79-96.

----- 1984 "On the Organization of Laughter in Talk and about Troubles" in J.M.Atkinson; J. C. Heritage(eds.)

----- 1985 "An Exercise in the Transcription and Analysis of Laughter", in Van Dijk, T. (ed) *Handbook of Discourse Analysis III,* Academic Press.

Jefferson, G.; Sacks, H.; Schegloff, E. A. 1987 "Notes on Laughter in the Pursuit of Initimacy" in G. Button; J. Lee (eds.) *Talk and Social Organization* Multilingual Matters.

河合隼雄(ed.) 1969 『箱庭療法入門』誠信書房

Maynard, D. W. 1980 "Placement of Topic Change in Conversation" *Semiotica* 30: 263-290.

水川喜文　1992a "Topic Change and Laughter in Natural Language" paper presented at The Conference of International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis, Bentley College, U.S.A.

----- 1992b 「笑いの社会的組織化」『Sociology Today』第３号　社会・意識・行動研究会

Mulkay, M. 1988 *On Humor,* Basil Blackwell.

西阪仰　1988 「行為出来事の相互行為的構成」『社会学評論』154:102-118

岡原正幸　1987 「感情と社会」山岸健(ed.)『日常生活と社会理論』慶應通信

Sacks, H 1971 -> 1992 *Harvey Sacks Lectures* Basil Blackwell.

----- 1972 "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology" in D. Sudnow (ed.) *Studies in Social Interaction,* Free Press.=1989 「会話データの利用法－会話分析事始め－」in G. Psathas

et. al.北澤；西阪編訳『日常性の解剖学』マルジュ社。

----- 1974 "An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation" in R.Bauman; J.Sherzere(eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking* Cambridge University Press.

----- 1978 "Some Technical Considerations of Dirty Joke" in J.Shenkein(ed.) *The Organization of Conversational Interaction* Academic Press.

Sacks, H; Schegloff, E. A.; Jefferson, G. 1974 "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation" *Language* 50:696-735.

Schegloff, E.; Sacks, H. 1973 "Opening up Closings" *Semiotica* 7:289-327.

=1989 「会話はどのように終了されるか」in G. Psathas et. al.北澤；西阪編訳『日常性の解剖学』マルジュ社

谷　泰　1987 「会話の中の笑い」谷(ed.)『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研究所

----- 1989 「笑いのコミュニケーション上の機能」糸魚川;日高 (eds.)『応用心理学講座 11 ヒューマン・エソロジー』福村出版

山田富秋　1991 「司法場面における『権力作用』」『社会学研究』58:73-97

安川　一　1991 『ゴフマン世界の再構成』世界思想社

（みずかわ　よしふみ）

社会学の名著

現象学的社会学をリードする―
アルフレッド・シュッツ著作集
1 社会的現実の問題 I 4635円
2 社会的現実の問題 II 4120円
3 社会理論の研究 5150円
4 現象学的哲学の研究 近刊

危機と再生の社会理論
現代社会の解読と社会学的営為の可能性を明らかにする
佐藤慶幸／那須壽・編著 5150円

社会問題の構築
ラベリング理論をこえて
J・キッセ M・B・スペクター 村上・中河・鮎川訳 4635円

日常性の解剖学
"会話分析"に関するエスノメソドロジーの記念碑的論文
G・サーサス H・ガーフィンケル他 北沢・西阪訳 2750円

意識論から言語論へ
社会理論の核心を解く社会学の言語論的基礎に関する講義
J・ハーバーマス 森・千川訳 2750円

意味と解読
記号を概観し、社会学の原点を記号学にもとめる
丹下隆一 3708円

マルジュ社
〒113 東京都文京区本郷2-5-2
☎03(3813)7349 振替東京7-85272